

世中は夢のわたりのうきはしかうきわたしつ、物をこそ思へ、といへるも浮はしに別の義なし。

〔玉勝間六〕夢のうき橋

夢の浮橋といふは古き歌に、世の中は夢のわたりのうきはしかうち渡しつ、物をこそ思へ、とあるより出たることにて、夢の渡りの浮橋といふは、萬葉三の卷に、吾行は久にはあらし夢乃和太瀬とはならずて淵にておれも、又七の卷に、芳野作とて夢乃和太ことにし有けりうつ、にも見て來し物を思ひし思へば、など見えて、吉野川にある夢の和太といふ名所にて、そこに渡せる浮橋也、懷風藻に、吉田連宜が從駕吉野宮詩に、夢淵と作れるも此所也。○中源氏の物がたりに、卷の名とせるは、夢のことにとれる也、同じ物語薄雲卷の詞に、夢のわたりのうきはしかとのみ、うちなげかれてといへるも、たゞ夢かといふこと也、然れば紫式部は、名所なることをしらすして、かの歌なるをも、夢のこと、おもひ誤れるにやあらん、此もの語に、夢のこと、して、卷の名につけたるより後は、ひたすら夢のこと、なわり、狭衣の歌にも、はかなしや夢のわたりの浮はしをたのむ心のたえもはてぬよ、

〔新古今和歌集春〕守覺法親王五十首歌よませ侍けるに

藤原定家朝臣

春の夜の夢のうき橋とだえして嶺にわかる、よこ雲の空

〔素性法師集〕鋪妙の枕にだにもふさばこそ夢の玉しひ下にかよはめ

〔下學集〕下五下夢下熱下氣下多下則下見下火下冷下氣下多下則下見下水下風下氣下多下者下

〔瑤囊抄七〕常ニ五夢ト云ハ何々ゾ

是未慥カノ説ヲ不見侍若熱氣多キ者ハ見火ヲ冷氣多者ハ見水ヲ風氣多キ者ハ飛墜多食ノ者ハ、飲食ノ不足ヲ見ル、見聞多キ者ハ、熱境ニナント云、是等ニヤ、只是モ五藏ノ掌トル所歟、其ノ神